

平成十五年四月十三日 和敬塾入塾式記念講演

「大学と学問」

英知大学大学院教授 東京大学名誉教授 今道友信先生

皆さん、こんにちは。(会場より「こんにちは!」の声)

皆さんの元気な若々しい声を聞いてうれしく思います。

本日の演題は「大学と学問」です。お手元のレジュメをご覧ください。導入部として「0. 戦いの世に面して」と題しました。

人間は現実を離れて生きることはできません。今、日本が直接戦いのさなかにいるわけではございません。けれども私どもが生まれてきたのは二〇世紀であり、皆様もお生まれになったのは二〇世紀の終わりのほうです。二一世紀に入って二年余りたっておりますから、二〇世紀の最初から今までの一〇三年間の反省から入ってみたいと思います。

この一〇三年間は、二つの素晴らしいことがあった時代だと思います。どの時代にも素晴らしいことはありませんが、ほかの時代にはない素晴らしいことの一つは、「人権を重

んずる」という考え方です。

皆様は大学にお入りになって、どの大学にも女子学生もたくさん入っているのをご経験になったでしょう。私が大学に入りましたのは敗戦直前の一九四五年でございましたが、その春に東京大学に入学したとき女性は、一人もおりませんでした。「女子入学すべからず」という規定はないのですけれども、一般に女性が大学に学ぶということは例外中の例外でございました。

いや、女子大があったのではないかとおっしゃる方もいるでしょう。日本女子大、東京女子大またお茶の水女子高等師範学校のように一見したところ大学にならぶ学校もありましたけれども、第二次大戦前はそれらのどこを出ても学士の称号はもらえませんでした。というのは、あのころは普通、中等学校の五年、予科あるいは高等学校の三年を経てから大学に入る。そして、当時大学は三年制度でしたので、その大学で三年すると学士をもらえます。女性の場合は

女学校(女性の中等学校)から直接三年の学校に入るの、専門学校卒業扱いです。別に制度がどうのこうのということではございませんが、学習権ともいえるべき、正式の大学で学習をする権利も女性に十分与えられていなかったという時代がありました。諸外国でも大学に進んだ女性の数は非常に少なかった。

それから、選挙権のことを考えてみましょう。人類の半数である女性は、多くの国々でどれほど学識があろうと、仕事を持つていようと選挙権を持つことはできませんでした。日本では一九四六年に女性が選挙権を得たのです。日本だけがおくれたのだらうとお考えかもしれませんが、フランスやスイスなどでも日本と同じころに女性の参政権が確定したのです。ですから考えてみますと、二〇世紀の中ごろまで女性の権利はかなり軽視されてきました。後のことは申しませんが、労働者が本当に市民としての権利を獲得してきたのは、マルキシズムの長い運動がございましたけれども、実現したのは

二〇世紀です。

それから、身障者の人々がどんな扱いを受けていたのかということをお考えください。二〇世紀にそういう人々が学校にも来られるようになった。どんなに身体障害があっても、本当に胸を張って世の中に出てこられるような車イスや機械も出てきました。また世間も、階段ではなく車椅子で登れるようなものをつくるという配慮をするようになってまいりました。

また、人種差別も二〇世紀の最後のころに、とうとう全世界でなくなるようになってきました。現実にはまだ問題が残されているにしても、人権の平等は二〇世紀の本当に素晴らしい功績だといってよろしいでしょう。

それから、もうひとつは「科学・技術」です。科学も技術も別のものですが、本当は一つにして話すのはよくないことなのですが、時間の都合もありますので「テクノロジ」ということとして一緒に論じたいと思います。科学技術の進歩について考えると、二〇世紀の中ごろまで、どんなにイマジネーションの力のある人でも、月の上を人間が歩くなどということは考えられませんでした。しかし、そういうことも実現しました。

それから、不治の病といわれていた病気がたくさんございましたが、そういうものも治るよ

うになり、社会復帰できるようになってきた。細かなことを一々申し上げませんが、そうすると「人権尊重」と「科学技術の輝かしい躍進」というこの二つが、誰も疑いのない二〇世紀の素晴らしい仕事であったと思います。

でも、レジュメをご覧いただければ分かるように、次に「二つの大きな矛盾」という言葉を書いております。「人権の基礎は、一体何だろう」と考えた場合、それは何といっても、人命です。しかし、人の命が二〇世紀ほど多量に殺戮された時代はありません。ひとつだけ例をとると、戦死者の数について考えた場合、有史以来、つまり歴史が始まって以来一九世紀の末までの戦死者の数と、二〇世紀だけの戦死者の数ではどちらが多いか。二〇世紀だけにしないで二〇〇三年までとしましょう。二〇〇三年のこの四月までの死者とどちらが多いかというところ、このわずかに一〇三年のほうが、有史以来一九世紀の終わりまでの戦死者よりも圧倒的に多いのです。これはどの歴史家も認めます。有史以来のことですから正式な統計はもうとれません。

もちろん、そういうときに必ず出る反論は、「いや、二〇世紀は人口が爆発して五〇億にもなり、二一世紀になるとそれ以上になっているのだから、人口が多い分だけ戦死者の数が多いのも仕方がない」という意見です。でも二〇世

紀より前の戦いには、戦場という概念がありません。ウォータールー（ワーテルロー）の戦いとか、日本海海戦とか、関ヶ原の戦いと呼ぶでしょう。というのは、お城を攻めるとき以外は、だいたい人のいないところが戦場となり、そこで戦った。だから、戦死する人たちは、その覚悟を持って出陣した人々です。それもむごいことですが、そういう仕事に誇りを持っているような人もいます。

けれども、二〇世紀の戦いはどうなったか？そして二一世紀におよんでの戦いはどうなったか、というと、いま皆さんがテレビジョンで見ると、市民も兵隊と同じように爆撃を受けるのです。生まれたての赤ん坊も平和論者も兵隊と同じように殺されている。イラクの戦争を見れば、アメリカはひどいところだということかもしれないけれども、戦いの相手になるほうも、テロリズムの支援者だったかもしれない。悲しいことに都市爆撃の最初のひとつは、日本が中国の重慶を無差別爆撃したことです。ですから日本はやはり早くからそういう悪に参加していたのです。

そういうことを考えてみますと、人権を大事にするという二〇世紀、そして二一世紀の今でも、何を使って大量殺戮をしていたかというところ、科学技術を使って行ってきたのです。科学技術は人間の現実の生活を幸福にするために考え

られていたに違いないのですが、それがこういう結果を持つということ、そうすると、二〇世紀、二二世紀の今まで誇りとなっていたものは、実は二つとも、つまり人権の思想と科学技術の目的は、全く逆の方向に使われていたのではない。

人間をこれほど多く殺戮した時代を、人権を重んじた時代と本当に言えるのでしょうか。人権と科学技術という二〇世紀の誇りになっていた二つのものが、実は全く時代の恥につながっているのだと私どもは言わなければならぬ。どうしてかということ、「基本的に人間がなすべきことは何であるか」ということをまじめに考える倫理が不在の世の中になつていたからではないか、ということ。ですから、倫理不在のカオス—混沌としている精神状態の中で、我々はそのまま仕事を続けていっていいのだろうか。やはりそうではない、その中から人間の本当の理想、「星」ともいべきものを探していかなければならない。

皆様が大学にお入りになつて学問をするときにも、倫理不在の世の中に生きているのかもしれないから、自分も倫理を忘れていいのだというふうには考えたりせずに、「生きていくために何を理想とし、何を自分の戒めとして生きていかなければならないのか」ということを「自分で考えてください。」

お互いに日本という、ある程度文化的な国の中にいて勉強できる幸せを考える場合、国の悪口をあまり言う必要はないのですけれども、日本では国家公務員倫理法などということが語られて、なにかにつけて批判的なことを言う新聞までこれについては何も言いません。

しかし、倫理は法で規制されるようなものではありません。法が悪法ならば倫理によってこれを変えていかなければならない。人間の歴史を見てみれば、悪法を正すため、倫理のゆえに立ち上がった人が、人類の文化を本当にこしらえていったのです。ですから、日本全体が倫理法などという言葉が妥当するような国になっているということを考えて、「本当の倫理とは何であるか」ということをまた考えてください。

では、皆様が大学にお入りになつたということ、大学ということについてごく基本的なその名前から説明しましょう。皆様「承知のとおり、大学のことを英語で「university」と申します。ただの college や school ではなく、university といいます。フランス語では université (ユニヴェルジテ)、ドイツ語では Universität (ウニヴェルジテート)、そのほかの国でもみな同じようなものです。ということは何かという、ヨーロッパの各国、アメリカの各国、つまりインド・ヨーロッパ語という、

日本というならば横文字のアルファベットで書くような言語の全部が、大体ラテン語を祖語としていますから、似ております。ラテン語では universitas (ウニヴェルジタス) といいます。

この universitas の意味を理解すれば、「大学」という欧米語の意味が分かる。unum というのは「一」ということです。veritas というのは verum という動詞から来ます。verum というのはある方向を持つことで、vector (ベクトル) というラテン語もそこから出てきます。ですから、unum—verum というのは「一つの方向を持つ」と、そういう「団体」という意味です。一つの目的を共通に持つ団体のことで、ヨーロッパ中期のラテン語の書物を読みますと、universitas という言葉がたくさん出てきます。

なかにはガラス職人のための universitas、革製品のための universitas、石工のための universitas などもあります。気の早い人は、ヨーロッパには大学がたくさんあって、職業別の大学もあつたらしいと思う人がいますが、それは間違いです。ラテン語の中世では、一つの目的を共通に持つ団体すべてにその言葉を当てはめていましたから、universitas を今の言葉で訳せば「組合」というような意味になります。

その組合の中に、特別な組合が一つあつた。

それは学生と、その学生に知識を教える教師たち professor、その世話をする administrator — 今でいうなら事務系の職員といいたししょうか、この三者が一つになって真理の学問的探究を目指す組合がありました。真理の学問的探究という一つの目的として集まったのです。それがヨーロッパで特別な意味を持ったので、そういう団体だけをだんだんと universitas という言葉であらわすようになり、ほかの職人の組合は guild という別の言葉で呼ばれるようになってきました。

ヨーロッパに、古く八世紀から schola (スコラ) という語があります。歴史でスコラ哲学やスコラ神学という名前を習ったこともおありでしょう。schola が school のもとだというのは誰でもお分かりになると思います。

schola には三つの種類がありました。王室の王様が建てた schola。教区の大司教が建てた schola。教区というのは宗教の区域、大司教というのはは仏教でいうと大僧正のような人ですから、宗教上の権威のある人が建てた学校です。それから、修道院がつくった schola の三種類です。

この三つの schola でも一生懸命、勉強したのですが、真理の学問的研究というよりも別の目的がありました。何かというと、王室の王様がつくった schola は政府の役に立つような人材、

つまり「官僚養成専門学校」といいいいでしょう。大僧正がつくった学校は、仏教でいうならばお寺の住職を養成する「住職養成専門学校」といいいいでしょう。それから修道院がつくった学校は、山の中にこもって祈ったりする、よい修道者をつくる「修道者養成専門学校」です。どれも真理の学問的研究を目的にしたのではありませんでした。ですから、それらの実利を狙う専門学校とは違う universitas・大学は特別な職業を学ぶのではなく、人間としての教養を十分に積みながら真理を学問的に探究する、という目的を持った場でした。

さて、今日の大学での心構えについて考えてみましょう。現在、大学といいますが、そこで真理の学問的探究をするほど、真理の探究というのは低級ではなくなったといってもいいのです。つまり、二十代初期、あるいはもっと若い十八〜十九歳ぐらいで真理の探究に直接入るということはできないぐらい知識社会になってきました。知識社会で職業的な地位を獲得するためには、知識を持った職業訓練でなければなりません。ですから、今日の大学はある意味で、知的職業の基礎学力を習得する場になったといいいいでしょう。ですから、昔あった専門学校のような面も持っています。

では、専門学校と大学との違いは何かという

と、大学では専門的な知識ばかりではなく、少なくともある基本的な教養を身につけなければならぬということですが。だから、日本にある大抵の専門学校は二年か三年です。それで基本的、職業的な教育はできます。けれども、私も大学にかかわる者は大学院を除いても卒業するまでに四年必要だという理由は、三年、四年でそれぞれの学部の特徴の勉強をするにしても、一年、二年のころ、既に学部の区別はあるにしても、基本的な学力と教養を身につけなければならぬということになっているからです。

中国の古典の中に『大学』という立派な古典があります。レジメには「大学明德」と書いてあります。これは急いで書いたので、明という字を一つにしなければならぬのに二つ書いたんだらう、などと思っははいけませんよ(笑)。これは「大学とは明德を明らかにすることなり」ということです。「明德」というのは「常識で明らかにこれが徳だと思っているものを、さらに明らかにすること」であり、言い直してみるならば「常識を問い直す」ということです。

正義はひとつの立派な徳です。例えば、あなた方に「正義とは何か」と訊いたら大体分かるでしょう。言葉ではあらわせずとも正義と不正ぐらいのことは分かる。でも、「分かるなら

ことをおっしゃる方ではなかった。難し過ぎたら、勉強して追いついてこいといって難しい講義をなさったので、私もなかなかついていけないかったけれども、今でも心に残っている言葉があります。そして、それは皆様への贈り物として差し上げたい。なぜなら、今まで私にとつて非常に立派な言葉として理解しているからです。

それは「教養とは、他人の意見に同ずる必要はないが、他人の意見を理解すること。そして他人の立場を理解するためには知性がなければならぬ」。他人の意見に全く賛成する必要はないが、他人の立場を理解する心の広さ、そういうものが教養である。つまり、「教養とは他人の言語を理解する力だ」と先生はおっしゃいました。

そういつてみますと、例えば英米人と話をするとき英語の言語を理解していれば、いつも翻訳者を通じてそれを聞くより、理解の度はもっと深まるかもしれない。そうすれば言語の勉強ということも、試験のための必須科目だなどというのと違って、自分の本格的な教養、そして他者——他人と言ってもいいかもしれない、他人との言語的な交流を深めるために必要なものだろうということですね。

このときに安倍先生は、「子供のような会話を操ることを言語の知識というのではない。言

語というのは、ひとが文化の力を尽くして書いたものを読む力を必要とする」と注意なさった。これはやはり非常に大事なことです。今、いろいろなところで会話ができないと言語習得はできないというふうな考え、会話だけは上手な人がいます。しかし、本を見せると読めない。あなた方はそういうことがないでしょうけれども、日本語をペラペラしゃべるけれども、日本語を読みなさい、という読めない人がいる。これでは日本文化については本当の教養がないということでしょう。ですから、教養というのは、言語の粋、つまり言語の良いところを本当に理解することです。教養論で安倍先生のお名前を出してからここまでの一ページ分が安倍先生の言葉で、ここから先はまた私の話になります。

ですから、本当の教養というのは「humanism ヒューマニズム」に徹することです。ヒューマニズムという言葉はどういうことなのか。これは日本では本当に誤解されています。例えば、私が面倒な講義をしたのにかかわらず、学生たちが「先生、今日は一杯飲みましょう」などと誘ってくれることがあります。誘ってくれる学生もなかなかいいから、私はうれしくなってしまう。一緒にビールなんか飲む。私は年もとっているし、もともと酒に弱いかからビールを一杯でも飲むと私はすぐ

酔っぱらってしまつて、「あーあ、あしたの授業はもう嫌だ」なんて言う、学生が喜んで「いや、先生もなかなかヒューマニストだ」などと言うのです。(笑)

そうすると、私の中のヒューマニストは目を覚まして、「何を言う」と言い出します。「サルだつて酒に酔うぞ、『狸々』というお能を知らないか」とか、「カマキリだつて酒に酔うかもしれない」。漱石の書いた猫はビールを飲んで酔つた。だから、酒を飲んで酔うことをヒューマニズムなんて言うんじゃない」などと言出すと、学生が、またつまらん話が始まつたというような顔をするのですね(笑)。しかしこれは本場で、ヒューマニズムとは何かというと、ヒューマンなことを強調することです。

酒に酔うのは高等動物に共通のことです。サルだつて真つ赤になります。大体、オランウータンというのは酒をつくるそうです。果物を半分に分けてつばを入れてとつておいて、発酵させて飲むというのですが、本当か嘘か知りません。動物学者が言っているのですから半分は本当でしょう。ですから、ヒューマンなことを強調するということは、実は言語を大事にするということなのです。

動物にも言語があるのではないかと人がいます。確かにカラスはカアカア鳴いて何か相談しているらしい。それで衆議一決したら飛

んでいきますし、衆議分裂したときは別々に飛んでいきます。何か国連のようでもありません。それから、猫や犬でもお互いに何か言っているということがあります。でもそれは「本能的音声記号」といつて、人間の言語とは違います。

どんなふう違うのでしょうか？ 日本には類人猿の研究で卓れた業績をあげている人が京都大学にたくさんいます。今はもう京都大学だけでなく、いろいろな大学でそういう研究が進んできました。でもそれを興したのは今西錦司先生でした。そのグループで最初はニホンザルの研究をしましたら、ニホンザルは二六の音声記号を出していると研究者たちは識別しました。物をとるときに何かうなるとか、ボスが追いかけるときに叫ぶ声、逃げ惑うときの声は違うというように、いろいろあります。それでどうやら二六の音声記号があるようだと思別しました。

そのときに、ジャーナリストは気の早い人が多いから「ニホンザルのボキヤブラリーは二六ある」と書きました。ボキヤブラリーというのは語彙のこと、言葉のことです。つまり単語が二六あると書いた。そうしたら、学者たちは慎重です。それから「ちょっと待ってください、本能的な音声記号と言語を区別する必要があるから」と待ったをかけました。それで、これが音声記号なのか、あるいは言語なのかを区別しようと

いうことになりました。ではどうやって区別したらいいでしょう。授業だったら、「音声記号と言語をどうやって区別するか考えください」と言いつて、皆さんに紙を配つて書いてもらおうと面白いのでしょうか。答えを知つてみれば案外簡単なことですが、区別する方法はなかなか分からないものです。コロンブスの卵ということがあるから、私が次のことを言えば、「なんだ、そんなことなら知っていた」という人が多いのですけれども、知つていなかったから書かなかつたのではないのでしょうか。(笑)

では、実際にどうしたのかというと、やはり学者たちは偉いといえは偉いけれども、本当に基本的なことを考えます。孕んだ雌ザルを一匹群から離して別のところに置いておく。そして赤ちゃんが生まれるでしょう。赤ん坊ザルが生まれたら、そのサルと母親ザルとの間にどのぐらいの音声記号が出るかを、一〜三日ぐらいの間観察しました。そうしたら、本当に二六の音声記号を両方で出し合っているというんです。そうであれば、それは本能的な音声記号ではないのでしょうか。一生懸命学んで習得していく言語とは違います。

皆様は何となく言語を覚えて、何の苦しみもなかったと言うかもしれませんが、まだ二、三歳のころは片言しか言えません。六つぐらいになつてようやく、いわゆる日本語が分か

るようになったり、外国の方だったらそれぞれ国語が分かるようになったときに、学校に行きますね。そうじゃないと先生のおっしゃること何も分からないでしょう。

人間も本能的音声記号というのは持つています。赤ちゃんでもおしめが汚れたときの泣き声、おなかが減つたときの泣き声、痛くてかなわないときの泣き声、喜んでる笑い声のようなものとか、いろいろあります。そして母親やその代理者は経験によつて、あるいは何となしの直感によつてその区別が分かるから、育てられるのです。皆さんもお腹が痛いときに「うーん」と言つたり、「うー」とか言つたりしませんか。それから、びっくりしたときには「うわっ」とか「きゃーっ」と言うでしょう。あなたの方で親御さんに「あんたはもう大きくなつてきたから、驚いたら、うわっと言いなさい」とか、「痛いときは、うー、と言いなさい」と習つた人はいますか。やはり人間にも本能的音声記号があります。

でも、言語は一生学ぶのです。日本語でさえもです。皆さんの中に、もう私は国語辞典は要らないという方はあるのでしょうか。国語の先生だつて国語辞典は必要です。なぜならば外来語が入つてきて、それは国語にないから字引を引かないと分からない。毎日毎日、新しいボキヤブラリーが新聞に出てきます。大学を出て大学

院の先生で日本語の新聞が読めないといったら、ちよつと物笑いの種になるかもしれません。しかし、私はいろいろな勉強をしましたけれども株式の勉強はしていませんから、日本経済新聞などという新聞を読むと半分以上何のことか分からない。「ダウ平均株価」などといったって、何となく分かったような顔をしているのですけれども、私は本当のことは分からないのです。こういうことも私が政治哲学の領域を研究するときには必要になります。

ですから、人間が使っている言語というのは、生涯学ばなければなりません。新しい研究のときに新しい言葉も出てきます。自分がつくるときもあります。ですから、皆さんもこれから本当の意味でのヒューマニズムに徹することを考えてみてください。すなわち「言語」は本能的なものではないのですから「本能的音声記号」とは区別してください。本能的というのはむしろ言語を話す力そのものです。その初期の本能的音声記号の段階を離れて言語を勉強する。そして、その言語が一番見事に書かれているのはどこかというところ、「古典」です。古典を大事にしてください。

「大学は明德を明らかにする」という言葉は、紀元前に書かれていた中国の古典です。それでも二〇〇三年の大学入学者に意味のある言葉です。謙虚に、人類のつくり上げてきた古典を

大事に読むということ、それが「ヒューマニズム」の人だということです。

それでは、学問の問題に入りましょう。学問というのは何か。知識には違いありません。でも、情報をたくさん持っていてその根拠を知らなければ、学問的知識があるとはいえません。「学問の常識的な情報」というとおかしいけれども、今までに世界の人が少なくとも高等学校ぐらいの年齢のときに、一応間違いない情報だと言われるものを「学問的情報」と言います。字引に書いてあるようなこと、字引に二〜三行で説明してあるようなことは学問的情報です。それは知らないよりはいいかもしれないけれども、それを英語でいうと *information* であって、*knowledge* になっていません。*information* から知識へ向上していかなければならぬ。

知識というのは、そのインフォメーションの原因と結果を説明できるぐらい理解することです。考えてみると大変です。例えば、テレビジョンを買いますと、リモートコントロールの変なものももらいます。そして「これを押すとチャンネルが変わります。これを押すと音量が変わります」と教えてくれる。そうすると、みんな「分かりました」と言いますね。英語でいうと「Yes, I see」です。では何を分かったと言

っているのでしょうか。それは操作手順を会得したに過ぎない。なぜ、これを押したらチャンネルが変わるのか、その情報の知識を知ったうえで、「分かった」と言っているのでしょうか？

皆さんのなかに、理科の勉強をなさって理学部に進んで、そういうことを説明できる人もいます。でも、私は本当をいうとチャンネルどころか、そもそもなぜ映像が映るのか、イラクの戦争の映像が映るのはどうしてなのか分かりません。ですから考えてみると、ふだん使っている機械や情報の取り扱い方を会得すれば、それを「理解した」と我々は言っていますが、そうではない。情報を知ったとか、操作手順をわきまえたということは技術的な情報かもしれないが、科学的な知識にはなっていません。学問的な知識になっていない。

同じようなことは文化的な世界でもたくさんあるでしょう。例えば、先ほど例に言いました「正義」とは何ですか」と訊かれ、「正しいことです」と答えたとします。私が「では、正しいことは何ですか」と訊くと、今度は「正義です」と言うのでしよう。それでは犬がシツポを追いかけているのと同じグルグル回りの堂々巡りですね。例えば「正義」ということの一歩の基本は、物質あるいは物が公平に分けられている社会があったら、それがまず正義が一番初歩的に実現されている社会だ、というので

す。したがって正義の一番の基礎は「物の公平な分配」ということにあります。

「公平」は平等ではありません。「平等」なら、例えば食料を分けるときに、少ししか食べなくてもいいというような八十歳のじいさんにも、お米をたくさん分ける。つまり食べ盛り、若い盛りのあなた方と私が同じだけの分量をもらおうとしたら公平ではありません。私は食べようと思ってもそんなには食べられないから、余ったものをこっそりヤミで売るかもしれないかもしれません。だから、平等に分けるということ、公平に分けることとは違います。そうすると、正義ということひとつを知るためにも、公平と平等の違いも理解しておかなければならない。

それから、一番基本的な正義がそうだというのですけれども、正義には倫理的な正義や不正というのものもあるから、それは何だろうなどとさらに考えていかなければならない。だから、学問というのはいかにいう意味で論理的に問題を立てて考え続けなければいけません。明德を明らかにするというのは本当だと分かるでしょう。

レジュメをご覧いただくと、「3. 結果の享受ではなく、その結果の知的理解へ進んでいかなければならない」とあります。先ほどのテレビジョンの例で分かるでしょう。それから「知

的的理解から知的説明へ」。自分で知的に理解しても、それを知的に説明することができなければならぬ。これは難しいことです。でも、本当に理解したら他人に説明することもできるはずですよ。

そうすると、言語の大事さが分かるでしょう。知的理解だけなら言語でなくて、記号だけで何となく分かるということがあるかもしれない。しかし、それを説明するためには言語をきちんと語らなければならぬ。ですから、「予在する知識から、創造的知性の自己展開へ」と、新しい理論とか、新しい考えへの展開がなければならぬということですよ。残念ながら、レジュメにある「普遍と個人」の項目は時間が足りないかもしれないから抜かします。

さて、「見えないものの力への信」に進みましょう。「見えないものの力への信」というのは何かというと、変なことですけども、見えないものが見えるものを支配するのだという確信がないと、学問はできないのです。誰が法則というのを見たことがあるのでしょうか？ 私が手を離せばボールが下に落ちるのは、引力の法則というのがあるからです。引力の法則を見たりなめたりしたことがあるかというところではあります。でも、ありとあらゆるものはその法則に従います。見えるもの、なめるこ

とのできるもの、つかむことのできるもの、そういう可感的なものを支配する法則は、感ずることはできなくて学問の目でしか見えません。そういう意味で、不可視的なものが支配することへの確信がなければならぬ。それを発見するために見えるものを研究するのです。

そういう学問を背負うものはなにか？ それは人間、あなた方です。今年、世界中の大学に入った人がこの学問の伝統を継がなかったら、誰が次の世代に伝えていくことができるだろうか。まだ生きている人があつて伝えることができるかもしれないけど、あなた方はどんな仕事をなさるにしても、人間が積み上げてきた学問を自分で学んで、次の世代に伝えていく必要がある。しかもあなた方は、自分で学ぶだけではなく、それぞれの仕事において知的に、少しでも新しく文化、あるいは文明を進展させていく候補者たちです。

では、そういう人間はどういう存在なのだろうか？ 人間は欲望を持ちます。欲望の中には何か知りたいという気持ちがありますね。それは「curiosity・好奇心」として出てくることがあるでしょう。好奇心という欲望は動物でも持ちます。人間は動物ですから欲望も持っているし好奇心も持っている。猫は本当に好奇心があります。しよつちゅう物の陰に何かあるか見たりしていますが、動物は大なり小なりみんなそ

うです。人間もそうでしょう。

でも、人間は欲望のほかに「あこがれ」「憧憬」というのがあります。人間は動物ですから欲望を持ちますが、動物が持たないあこがれというものを持ちます。レジュメに「憧憬の矢を放て」と書きましたけれども、本当に自分のあこがれの矢を放つて、その矢の及ぶところにまで進んでいくような気持ちが大仕事です。好奇心が学問のモチベーションだという人がいますけれども、つまらない好奇心もあるのです。

例えば——どうぞ、こんなことは考えないでください。ですけども、例として言わなければいけない——人間はどのぐらい殴れば死ぬだろうか。ちよつとおもしろいなと思ってどんどん殴ってみて、二十四時間殴つたけど生きているやつがいる、とか、二四時間三〇分殴つたら死んじゃったとか、あいつは日本人だからアメリカ人はどうだろうとか、それだって好奇心ということならば好奇心です。ですから、本当に好奇心だけで学問ができるのかといったら、ちよつどジャーナリズムが、もし、世間の好奇心を満足させようとしてスキヤンダルだけを探して、それで紙面全部を埋めたら本当のニュースや社説が出てくるか、ということを考えれば分かるでしょう。

ですから、今までの本当に卓れた学問の成立してくる原理というのは好奇心ではなく、ある

「讚美の念」です。「素晴らしいことだ、これはどうして起こるのだろう」「太陽の光のおかげで我々は生きているのではないか、光というのはこういうものなのだろう」というある讚美の気持ち、これをラテン語で *admiratio* (アドミラーツイオ) と言います。英語では *admiration* です。「讚美の念」こそ学のモチベーション」です。

レジュメに「*thaumazein*」とカッコして変な字が書いてありますが、これはプラトンやアリストテレスが学問のはじまりとしたギリシア語で卓れたものに出会った賛嘆の気持ちです。*thau* というのは崇高なもの、卓れたものという意味です。その語を含んだタウマゼインを近代の人たちはみんな、これを「驚異、驚嘆、驚き」と訳していますが、これは驚きではなく本当は「卓れたものへの讚美の念」です。ですから、知的人間になるために大学にお入りになったあなた方は、その卓れたものとの出会いを求めなければならない。

卓れたものは書物の中にもあるでしょう。また、自分とは違った卓れた資質を持つ友達との出会いもあるでしょう。先生との出会いもあるかもしれない。先生というのはある時期での先生でしかない人もいます。小学校のときには賛嘆したけれども、中学になったらそれほどでもなかったという先生もいるかもしれない。大学

に入ってもあの先生のおかげだと思ってしまうぐらいの小学校の先生もいるかもしれない。でも、どこにあっても、探せば、先生がたのなかに自分分を持つていない卓れたものを持つている人が一人はいるはず。そういう觀念、資質、人物をおのれの周囲に探してみる事です。

特に卓れたものとの出会いということでは、芸術があげられます。絵画でも音楽でも文学でも演劇でもいいですから、自分の好きな芸術との出会いによって、卓れたもの、自分が到底及びつかないようなものへのあこがれが出てくると、自分がその道でその人に習うというのではなくても、卓れたものとは何かということが分かってくる。そして、そういうものへの賛嘆を自分の生きる道の中で見つけていけば、大学生活というのはいろいろと水平的な喜びもあるでしょうけれども、「垂直的な高さ」を知的に知ることになるのではないかと思います。

最後になりますが、私のつたない話を一生懸命静かに聞いてくださって本当にうれしく思います。私も年をとって若人々に語る機会はずいぶん少なくなっていますが、今日はおめでたく意義のある入塾式にお呼びいただいて、若い皆さんとひとときを過ごすことができたのをうれしく思います。人間のすることというのは、良いこともあるけれども、つまらないこともいっぱいある。私の話の中でも良い

ことのほうが少ないだろうけれども、何か良いところをつかまえるようにしてください。

そして、それを言われたとおりに考える必要はないので、あなた方の心の中で種の一つとして拾ってくださればよろしいと思います。そういう良いところを見つけるのを、ギリシア語では「krino」（クリーノー）といって、そういう仕事を「kritike」（クリティケー）といいました。それが「critics」のもとです。それを日本人は「批判」という言葉で訳しました。批判というのは悪いところを見つけることです。ですから、授業などのときに何も先生の言うとおりに聞く必要はないのですけれども、先生の悪いところだけを探したら醜体験しか出てこない。演奏でも下手なところだけ探したら美的経験になりません。

だから、授業で良いところを探す。どんな先生でも良いところばかりの先生はいやしません。でも良いところのひとつもない教授や助教や講師はいないでしょう。だから授業でも良いところを探すことができれば、それを自分の心の種とし、乗り越えていく。教師を乗り越えていかなければなりません。元気で知的な生活は、最初に言った倫理的に正しいことにあこがれる気持ちでなければ出てこないということ。を忘れないで、どうぞ勉強を続けてください。どうもありがとうございます。（拍手）

レジュメ「大学と学問」

平成15年4月13日
和敬塾にて
今道友信

0. 戦いの世に面して

20世紀と21世紀の2年余りの反省
二つの大きな矛盾
倫理不在のカオスの中から星を

1. 大学

university, universite, Universitat ←universitas
unum(一) verito (方向を持つ) 目的をもつ団体、組合
真理 (veritas) の学問的探求の場、schola との差異

2. 大学での心がまえ

「大学明明徳」常識や情報の知的反省
知識社会の成立と大学学部の降級
大学も各種の知的職業の基礎の習得の場
専門学校との差異としての教養
教養としてのhumanism humanであることの強調
言語(音声記号とは違う) その磨きの場としての古典
読書の世界 友の意味

3. 学問

情報から知への向上
結果の享受ではなく知的理解へ
知的理解から知的説明へ
予在する知識から創造的知識への自己展開
普遍と個人
見えないものの力への信

4. 人間

憧憬(あこがれ)をもつ存在。欲望との差
憧憬の矢を放て
好奇心ではなく賛美の念(admiratio)こそ学のmotivation
 $\theta \alpha \upsilon \mu \alpha \xi \epsilon \iota \gamma$ (thaumazein) の意味
卓れたものとの出会い 芸術の意味

5. 結び

6. 参考文献

プラトン 『ソクラテスの弁明』(岩波文庫等)
ニイチェ 『ツアラトウストラはかく語りき』(中公クラシクス)
今道友信 『知の光を求めて』(中央公論新社)
今道友信 『エコエティカ』(講談社学術文庫)